

教 仁 名 聞

第38号
(発行日)

2013年11月1日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒6638113 西宮市
甲子園口2丁目7-20
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

不安 煩悩 と お念仏

仏さまは私たちを「煩悩具足の凡夫」と仰せられています。煩悩が「具足」しているとは、煩悩が身に付ききって離れることが出来ない、それが凡夫の姿であると仰せられるのです。

その煩悩とは「むさぼり、いかり・はらだち・そねみ・ねたむ、かざる、へつらう」などの心ですが、聖人は『歎異抄』の第九章にはこう仰せられています。「いささか所労のこともあれば、死なんざるやらんところぼそくおぼゆることも、煩悩の所為なり」と。

「いささか所労のこと」とは「少しでも病気にかかると」ということで、そうすると「死なんざるやらんところぼそくおぼゆる」いわば「死ぬのではないかと心細く思われる」とおっしゃるのです。いわば、ちよつとした病気になる、死ぬのではなからうかと不安になると。こうした不

安が起こるのも「煩悩の所為(せい)」なのだよと仰せになり、これも煩悩なのだご指摘になっています。

病気の不安、死の不安も煩悩なのだと言われるのですが、こういう不安の根元は「死にたくない生き延びたい」という生への深い執着心から起こるのであり、愛執の煩悩であるといえましょう。

そうすると病気の不安すなわち健康不安や死の不安、それのみならず、それに連なる生活不安も煩悩でありましょう。

「こんな収入では生活がやっついていけるだろうか」「不況が続くと食うていけなくなるのではないか」「生活が破綻して路頭に迷うのではないか」などという生活不安は、死にたくない生きのびたいという生への執着が元になって起こる煩悩といえましょう。

このように煩悩具足の凡夫とは、むさぼりや怒りや腹立

ちやねたまやうらみなどの煩悩に悩まされるだけではなく、生活不安、健康不安、死(死後)の不安などの煩悩を抱えながら生きている者のことでもあるといえます。実際、日々悩まされ煩わされているのは、むしろこの「生活不安、健康不安、死(死後)の不安」なのではないでしょうか。

このような不安煩悩は凡夫であるかぎり、死ぬまでなくなりませんが、(死んでも無くなるとは言えませんが)、しかしこの煩悩を意味あらしめ、この不安に耐えつつ、しかもその中にも安らぎを見出し、やわらぎを見出し、喜びを見出させて下さるのがお念仏であります。

《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(日)

午後二時始

ご講師 大谷派教学研究所所員

高間重光 先生

*なお、同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

お念仏は、はかりなきいのちの仏である阿弥陀仏(無量寿如来)が私ども一人一人に根底からはたらきかけ、(南無阿弥陀仏)と喚びかけて下さっている言葉であり、仰せなのです。

ナムアマミダブツと称え、ナムアマミダブツと耳に聞かされることとは、とりもなおさず無量寿如来(阿弥陀仏)が「助ける、助ける」との仰せの言葉ですが、それは無量寿如来が「我は汝と共にここにいて、汝を撰め取って離さない」とのお心であり、もう一ついえば「我がいのちの外に汝のいのちはないのだよ」との思し召しでもあります。

阿弥陀仏が「我がここにいる」と、私の真実主体として名のりたもう、その姿がナム

アミダブツと聞こえてくるのが、お念仏です。

私たちはそのお念仏を聞かされると、「ああ有難い」と感ぜずにはおれませんし、不安な日々の生活のなかにそのつどホツと一息をつかせてもらうのです。そしてますます阿弥陀仏との交わりを深めたいと願わずにはおれませんか、お念仏が相続されていくのです。

そういう意味で日毎の不安は阿弥陀仏の広大なお働きにそのつどであわせていただく大事なご縁になります。不安煩惱あればこそ南無阿弥陀仏の有難さを知らされるのです。ですから不安煩惱は念仏の助縁となつて下さいませし、南無阿弥陀仏によって不安の多い人生生活の中に安らぎをいただくのであります。喜びをいただくのであります。

不安煩惱はそういう大事な意味があります。聖人の「高僧和讃」に

罪障功德の体となる

こおりとおおきにみずおおし
こおりとおおきに徳おおし
さわりとおおきに徳おおし
と仰せられるごとく、「さわ

りおおきに功德が多い」のであります。さわりというの、ここでいうとさまざまな不安です。

だいたい「はかりなきいのちのはたらき」（無量寿）は見えないものです。見えてい

るものは、いのちのはたらきそのものが限定されて形をとつたものであります。普通私たちは、形ある自分の肉体を「生命」と言っています、それはいのちのはたらきが取つた一つの形であつて、いのちそのものは目に見えず、いつでもどこでも働か

づめに働いている無量無辺のはたらきであります。こうした無量無辺のいのちの上に私たちは置かれ、そこに生まれ、そこにおいて生き、そこにおいて死するのであります。しかも迷いの凡夫はそのいのちの中で生死を繰り返しております。

もつと身近に云えば、こうした無量のいのちのはたらきがなければ、私たちは今存在することも働くことも考えることも寝ることも、更には悩むこともできないのです。しかもこのいのちには「無

量の智慧と慈悲の功德」があると聞かせたいです。ですから、それは自然科学で扱うような生物学的物理的な生命をも含みつつ、智慧と慈悲の功德を本質とする「あたたかいいのち」でありましょう。その大悲のいのちに包まれている私たちです。

ただ、この世に生きる私たち凡夫は、身体（身心）において今ここを生きる外ありませんから、この身体に伴う苦痛や不安を免れません。ですから私たちは、今この私に即して根源的に働いて下さっている大悲の無量のいのちとの関わりをお念仏においてさせていただくことが大事なのであります。

もちろんこうした原理的なことは知らなくても、不安だらけの人生生活の中で、南無阿弥陀仏とお念仏を申し、お念仏を聞いていくところに、そこに私を超えた阿弥陀如来様の大悲のお心が私にであいたまい、私をどこまでも抱き取つて下さり、大悲の中に住まわせて下さっていることに安心をさせていただくのであります。（了）

正信偈に学ぶ問答

（五十七）

極重悪人唯称仏

我亦在彼撰取中

煩惱障眼雖不見

大悲無倦常照我

（書き下し）極重の悪人は、ただ仏を称すべし。我また、かの撰取の中にあれども、煩惱、眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照らしたまう、といえり。

（現代語訳）「きわめて罪の重い悪人よ、ただ仏の名を称えよ。わたしもまた阿弥陀仏の光明の中におさめ取られてゐる。けれども、煩惱がわたしの眼をさえぎって、見たてまつることができない。しかしながら、阿弥陀仏の大いなる慈悲の光明は、そのようなわたしを見捨てることなく、常に照らして下さる」と源信和尚は仰せられた。

N「この箇所、まず「極重の悪人は、ただ仏を称すべし」

とのお心についてお話下さい」

D「この箇所は非常に有難いところ。まず極重悪人と言ふのは、私たちの姿ですが、これは私たちのうがった反省によつて知られる姿ではなくて、法蔵菩薩様（阿弥陀仏）が一切衆生を助けようと願を起し、修行し、阿弥陀如来となられ、その如来法蔵様のおん眼に見られ、大悲のお心で同悲し、救わんとされた、そのお目当ての私たちの姿、衆生の姿、それが「極重悪人」であります。源信僧都は、この大慈大悲の阿弥陀仏のお心にふれられて、ご自身を（極重悪人）と感知しておられるのであります」

N「極重悪人というのは人間が自省によつて評価した人間像ではなくて、阿弥陀仏のおん眼に見られた、私どもの罪深く、煩惱の盛んな、救い無き者のことなのですね」

D「ええそうです。私たちはどれほど自分を反省しても自

分を極重悪人とまでは思えないものです」

N 「極重悪人とは具体的にどういう姿でしょうか」

D 「先ずは、生死流転をながながと繰り返して浮かぶ瀬も無き凡夫であるとの意味でありましょう。そしてそれは無明によつて自他を分離して我を立て、我執我愛で心が染められていく私たちの心でありましょう。無明煩惱がみちみちちていて、たとえ善を行つても、どこまでも自己愛を離れられない、そのような我が身のことではありません」

N 「こういう姿が、如来様のお心に映っている私の姿なのですか」

D 「ええ、清浄真実である如来様の御心に映っている私たちの姿なのです。私たちに清浄な心がなく、真実の心がなく、聖人は仰せになつていきます。しかも問題は、このような煩惱に汚れている私たちの心の性質を、改め直すことのできない、そういう苦惱の者、それが私たちであります。このどうしてみようもない者を、極重悪人と喚びたまい、如来様は救おうとされるのであります」

N 「そんな私たちに（唯称仏）すなわち（ただ仏の名を称えよ）と喚びかけられているのですね。この意味は」

D 「（ただ仏の名を称えよ）とは念仏往生の誓願のことです。無量寿経に釈尊がお説き下さったご本願の、（乃至十念 若不生者 不取正覺）という第十八願の思召し召しす。へ十声なりとも我が名を称える者が、もし浄土に生まれることができないようなら、私は仏には成らない」という、最悪最下の者にまで救いの手をさしのべて下さっている阿彌陀仏の誓いです」

N 「極重悪人とは、まさに最悪最下の者のことなのですか。それが私の姿であり、しかも（ただ仏の名を称えよ、必ず浄土に往生せしめる）と誓つて下さるのでね」

D 「ええ、ここに一切衆生の底にまで救いの手をさしのべられる、いつてみれば極重悪人の私たちをこそ、救わずにはおかないとの大慈大悲のお心を（ただ称えるばかりで助ける）と仰せられるのです」

D 「それは私たちの心には真実がなく清浄な心がないので、いつまでたつても無明煩惱を浄化しえず、仏になる可能性がないと如来法蔵様が見られたからでありましょう。そして法蔵様はご自身の力ばかりによつて私たちを清浄なる仏にしたいと願われ、その願いを成就するために、私たち一人一人に代わつて、私たちを仏にするためのご修行をなして下さり、その修行によつて、私たちのこの心の儘、この姿の儘、マルマル助ける南無阿彌陀仏になつて、今ここに喚びかけて下さる、そのお言葉が（我が名を称えるばかりで助ける）との仰せであります」

N 「そうすると、（我が名を称えよ）と仰せ下さるのは、今のこの私のままを引き受けて仏にしようとの、絶対無条件の救いを表されたお言葉なのですか」

D 「ええそうです。ですから（ただ仏の名を称えよ）は、私に対して救いの条件として称名念仏を要求する言葉ではまったくないのです。それは（そのままなりで助ける、引き受ける）の広大な大悲心を表わされたお言葉なのです」

N 「ではなぜ無量寿経には（そのままなりで助ける）という言葉で仰せられないのですか」

D 「その深い理由は愚かな私には分かりません。ただ、（ソノママナリのお助け）という仰せよりも、（我が名を称えよ）の仰せには、お念仏を称えるという行（行為）が必ずから伴います。そうするとこのままなりで引き受けて下さる」という大悲のお心が我が身の全体にしみこみ、実感されるという不思議な働きが（行）にはあると感じています」

N 「（極重悪人のままで救う）という思召しが、仏名を称えるという具体的な行において、ことに実感されやすいということですか」

D 「ええそう思います。そうすると（ただ称えるばかりで）の大悲の仰せを聞いては称え、その称える念仏を耳に聞いては仰せの大悲を感じるといふ、称えては聞き、聞いては称えるという反復が自然になされて、阿彌陀仏と私の関わりが深さがおのずと知らされてくるように思います」

N 「お念仏において仏の大悲

心が身に浸みて知らされるのですね」

D 「ええそう感じています。しかもご本願と念仏と信心とは、単純な一声の念仏に収まります。もし具体的なお念仏がなければ、本願と信心と念仏はバラバラになり、概念化してしまいます」

N 「お念仏という実行がなければ、仏法を聞いても觀念化し、なかなか弥陀の大悲の本願は身に浸みてこないということでしょうか」

D 「そうもいえるのではないのでしょうか。聖人の『教行証文類』（岩波文庫）には横超とは、本願を憶念して自力の心を離るると言われ、続いて専修とは、唯仏名を称念して自力の心を離る。」

と仰せられています。本願を想うこととともに（ただ仏名を称える）行に、自力の心を離れる意義をみておられるのもむべなるかなと思えます」

（了）



南蛮鐺
(C)SHOGAKUKAN
INC.

木村無相さんの法信 14

(昭和五十七年八月三十日の木村無相さんから私へのお手紙。前月号からの続き)

*

第二條に

ひとえに往生極樂の道を問ひ聞かんがためなり

と仰せあつて、その往生極樂の道としては、「ただ念佛一つ」とのこと、

「念佛よりホカに往生の道をも存知し、また、法門等も知りたるらんと心にくくおぼしめして、はんべらんは、大きなアヤマリなり」

と聖人が仰せあるのは、

如来が、念佛一つにて、ワレワレの生死出離については、全責任を負いたもうゆえ、ワレワレは、仰せのままに、「ナムアマミダブツ」をただ、ただナムアマミダブツといただくばかりで、生死出離についての責任は全部、如来が負いたもうということではありますまいか。

ここではからずも思い出したのは、『觀經』の下品下生のところでの、よき人の仰せであります。下品下生とは、

或は衆生有りて、不善業をつくり五逆十悪、もろもろの不善を具せん(ワレワレのことですなえ)。かくの如きの愚人(ワレワレのことですなえ、逆誘、セ

ンダイ、無佛法、無信)、悪業を以ての故に、まさに悪道に墮し、多劫を経歴して、受苦無窮なるべし。此の如きの愚人(ワレワレのこと) 命終の時に臨み(平

常でも同じこと)、善知識の種々に安慰して、為に妙法を説き、

教えて念仏せしむるに遇わん(この念仏は、憶念念仏といただくべきか)。此の人(ワレワレのこと) 苦にせめられて念仏するにイトマあらず。善友(善知識)告げて言わく「汝、若し念ずること(憶念念仏すること) 能わずば、まさに無量寿仏を称すべし。」

と。この「称名」、この「発音念仏」が、親鸞におきてはただ念仏してミダに助けられまいらすべし

との「よき人の仰せ」ただ念仏なんです。ねエ。

汝、若し念(憶念念仏) ずること能わずば、まさに、無量寿仏を称すべしと。ただ声に、口に、発音念仏すべし、と。

この点を、聖人が、この「発音念仏」について、聖人は『唯信鈔文意』のオワリ近くで、

「汝若不能念者」というは、「五逆十悪の罪人、不浄説法の者(ワレワレのこと)、病いの苦しみに閉じられて、心に

弥陀を、称念したてまつらば、ただ口に南無阿弥陀仏と称えよと勧めたまえるみのりなり。これは口称を本願と誓いたまえるをあらわさんと成り。「応称無量寿仏」と、のたまえる、この意なり。「応称」とは称うべしとなり。

第二條の

ただ念仏しての「ただ念仏」は、このような「発音念仏」、「口称本願」の口称念仏のことでありましょう。

○

八月三十一日(月)(未明、四時四十分)

紀さん、その「口称を本願」の「口称の念仏」を、紀さんも、私も、スデに、

いただいているのですなエ。

ソレは、なんとしても、否定出来ないことは、全くの無佛法者、もちろん、「信」も「行」もなく、そんなココロザシは、ミジンもない、そんな能力はミジンもない自性、本性の、オタガイ、紀さんも、私も、スデに、

ナムアマミダブツ

と、ともかくも「発音念仏」する身にならされていることが、オタガイがスデに、「発音念仏」、ともかくも、声に口に、口称念仏する身になつてゐることは、先便にも書いたように思うが、スデに、「口称の本願」力に、動かされ、催されて、ともかくも、口称念仏する身に、ならしめられている、否定できない、証拠ですなエ。

紀さんは、タヨリのはじめに

南無阿弥陀仏

と書くようにさえならしめられて。五濁、悪時、悪世界

濁悪、邪見の衆生(ワレワレのこと)には

彌陀の名号あたえてぞ

恒沙の諸仏すすめたる

と、聖人、『三經和讃』の、「弥陀経意」に、仰せられています。オタガイは、すでにオタガイの声に、口に、ナムアマミダブツと、無量寿仏名を称する身に、させられて、しまっていますなエ。

もうこの「口称念仏」からは、逃れられぬ、チギレチギレにしろ、十日に一ペんにしろ、もうこの「口称念仏」からは、おたがいのがれられぬ。

彌陀の名号あたえてぞ
恒沙の諸仏すすめたる
と、聖人、『三經和讃』の、「弥陀経意」に、仰せられています。オタガイは、すでにオタガイの声に、口に、ナムアマミダブツと、無量寿仏名を称する身に、させられて、しまっていますなエ。

彌陀の名号あたえてぞ

恒沙の諸仏すすめたる

と、聖人、『三經和讃』の、「弥陀経意」に、仰せられています。オタガイは、すでにオタガイの声に、口に、ナムアマミダブツと、無量寿仏名を称する身に、させられて、しまっていますなエ。

もうこの「口称念仏」からは、逃れられぬ、チギレチギレにしろ、十日に一ペんにしろ、もうこの「口称念仏」からは、おたがいのがれられぬ。

彌陀の名号あたえてぞ

とあるが、信じられないにしろ、ウタガワシイにしろ、ナニモセヨ、ともかくも、おたがいはずで「口称の本願」にとらえられて、「口称念仏」申す身にさせられて、いることだけは、否定、出来ないであります。

この上は、

この「口称念仏」のイワレ、真意をオイオイとお聞かせいただくばかりです。それを

口称念仏のイワレ、

口にスデに、ナムアマミダブツと申す身になつてゐるそのイワレを、聞けよ、聞けよが、「恒沙の諸仏」の「おすすめ」であります。

「弥陀の名号」はずでにおあたえ下さつての上で、「そのイワレを聞けよ聞けよ」と、「恒沙の諸仏」がオススメなのですなエ。

その力、誓願力、果遂の力に催されて、オタガイは、お聖教を拝読し、諸先徳の『語録』を読み、こうしてオタガイに、御法についての「文通」をせしめられてゐるのですなエ。

(続)